

♪さら……♪

(シーツの上で体が動く衣擦れの音)

リリウ

「んー……ふー……はあー……んんう♪

ふふ♪ どうでした？ ご満足……頂けました、か？」

リリウ

「私の方……えへ♪

……おまんこに、貴方のモノがまだ残ってるような感覚があつて。
キスも、いっぱいシてもらつたので……口に、貴方の味が残つていて」

♪ずつ……♪

(リリウが体を動かし、顔を近づける音)

リリウ

「身を離した今でも、貴方がまだ中に入ってくれてるようで……。
とても、幸せで……満足、していますよ♪ ふふふ♪」

♪くちゅ……♪

(リリウが手を伸ばし相手の体に触れる音)

リリウ

「貴方は……どう、でしようか？

私のお腹が、たぶん、とくんつて、貴方を受け入れたのと同じくらい、貴方も今満足して下さつているなら…
…この上なく、幸せと思えるのですが」

♪くちゅ……♪

(リリウが自分の場所を触る音)

リリウ

「んつ……ほら、どうでしよう？

こうして、ちょっとお腹を押すだけで……貴方が注いで下さつた、罪♪
こぼおつ……あ、んんうつ♪

あはつ、出て行っちゃいそうになつてます♪

……貴方が、感じて下さつた証と思つて……いい、ですよね？」

♪くちゅ……♪

(顔を合わせ肯定し、頷く音)

リリウ

「あつ……えへ♪

それなら、すごく……すっごく！ 嬉しいです♪

私、ちゃんと出来たんだって！ 貴方の罪、貴方の懺悔……受け止められたんですね？

ふふ♪ 改めて認めて貰えたら、なんだか実感が湧いてきて……えへへ♪

とつても、嬉しくなつてきちゃいました♪」

リリウ

「特に、あの……最後の懺悔の時！」

貴方が、私を離したくないって……嫉妬の罪を、全部注いで下さろうとしているのを強く感じられて。私それを感じるだけで、体がどんどん熱くなつて、胸の奥がきゅん……つて甘く締め付けられるみたいになつて。何より、そうしてくれてる貴方の事が……どんどん、どんどん！ とても、愛おしく感じられて……私、とつても……嬉しかつたです♪」

リリウ

「貴方に……初めての懺悔を、私の……ハジメテを貰つてもらえて、罪を注いで貰つて♪ 本当に良かつたつて、心からそう思います♪」

リリウ

「今この時も、強くそう感じてます。体も、心も、まださつきまでしていた懺悔の名残が……ポカポカした暖かさを感じていて。なんだかそれがむず痒いような……嬉しいような、愛おしいような……そんな気持ちがずっと湧いてて、私をいつまでも……蕩かせて（とろかせて）くれている、みたいですよ♪」

✧しゅる……✧

（熱を確かめるように、リリウがお腹に手を置く音）

リリウ

「この熱……この暖かさは、貴方が私を欲して……嫉妬して下さったからあるモノ、なんですよね？ 私が、他の方の相手に……懺悔をするのを嫌がられたからこそある……熱。

…………そつかあ」

リリウ

「すうー……ふうー……すうー……はあー。んー……うー。んつ……あの、一つ……その、ご提案……と、言いますか。

その……そうですね？ 我儘……そう、私の我儘があるので……聞いて、頂けますか？」

リリウ

「私の、夢は……その、先ほどもお伝えした通り。

孤児である私を拾い、育ててくれた……教会の教えに従い、ちゃんとしたシスターとなる事です。

そして……神父様や他のシスター達がそうしているように、迷い苦しむ人々の悩みを聞き……懺悔をして頂き、犯してしまった罪やその苦しみを……癒し、和らげて差し上げたいと……そう思っています。

これは、見習いとしてこの教会に拾われた時から感謝と共に胸の中に芽吹き、ずっと育ってきた……私の夢です」

△ぎゅ……』

(リリウがシーツを掴む音)

リリウ
「ですが、その。

今日、貴方の懺悔の相手をさせて頂いて……。やはり、懺悔というのは……罪を、受け止めるという行為は……ですね。大変なモノで……生半可な気持ちでやつてはいけないのではないかと、強く感じまして。実際、貴方にも……私が相手をしたせいで、嫉妬の罪を抱かせてしまうという失態をしておりますし、ですから……その』

リリウ
「……あう。

その、大変……大変、言い難い事なのですが。……まだ、私は実力不足と言いますか、研鑽（けんさん）を積むべきと言いますか。……貴方とも、まだ！ まだ……そう！ 7つの大罪があると考えると、まだ私が経験していない懺悔もあると、そう言えるのもありますし！ だから、えっと……あう』

リリウ

「すうー……はあー……すうー……はあーっ！ よし！ ……その、ですね！

きよ、今日の事……私、まだ神父様や他の皆には、言わないようにしてしまうと……そう、思うんです！ まだ、懺悔をするには私はシスター見習いとして積むべき経験があるかなと、急ぎ過ぎてはいけないんじやないかと……貴方を見ていて、そう……思うようになってしまいまして！ なのでっ！』

リリウ

「貴方さえ……貴方さえ、良ければなんですがっ！ れ、練習と言つてしまふと貴方にとっても失礼ではあるんですが……私、もつと……経験を積むべきだと、そう思うので！ 良ければもつと……貴方の悩みを、懺悔を聞いて！ 色んな罪を受け止めさせて頂きたいなど、そう……思うんです！

そして貴方の罪を全て受け止めきれるようになるまでは……ほ、他の方の懺悔をするというのは、その方にも失礼なのかもしれないとつ！ そう、思うように……なつて、しまいました……あう』

△すり……すり』

(もじもじとした様子で、リリウがシーツを触る音)

リリウ
「私が、立派なシスターになれるまで……貴方と。

貴方とだけ……懺悔をして、いたいな……なんて、そんな思いがちょっと……湧いて、しまってたり……して。

……うう、ごめんなさいっ！ ご迷惑ですよね、こんな我儘言われても！！
聞かなかつた事にして忘れて下さい……あう、大変申し訳ありませんでした……』

『ぎし……ぎゅうつ』

(リリウが抱きしめられる音)

リリウ

「きやつ！？ あう、どうし……んっ！
ん、ちゅ……ちゅう……はむ、ちゅう……れろ、ちゅう……じゅる……んんっ♪
んちゅう……れろ、じゅる……ちゅつ、ちゅつ……ふ、はあ……♪
あう……ど、どうされたんですか？」

やはり……わ、我儘言つて怒らせてしまいましたか？ うう、それなら申し訳ありません……え？」

リリウ

「い、いいんです……か？
また、私に貴方の罪を……貴方に懺悔をして貰つて、いいんです……か？
悩みなんて起きない方がいいのに……私の我儘に付き合つて頂いてしまうのに。
……私の相手を、して……頂けるんですか？」

『ぎゅう……』

(もう一度、抱きしめられる音)

リリウ

「あつ……。えへ……あは、えへへ♪
……はい♪
構わないと……そう、仰つて頂けるのであれば、こんなに嬉しい事は……ありません♪
……ありがとうございます♪

私の、こんな狡い我儘を優しく受け止めて下さつて……本当に、ありがとうございます♪』

リリウ

「えへ、えへへ……♪
まだ、暴食とか、強欲とか……そういう聞いていない罪もありますもんね♪ えへへ♪
あつ、勿論！ 今日お聞きしたような罪でも、新しく感じてしまつたものがあれば全然遠慮なく仰つて下さい
ね？
他にも何か……こう、別に7つの大罪みたいなものでなくとも……小さくシコリになつてしまつたようなもので
も、全然構いませんから！
なんでも……なんでも、言つて下さいっ！
私、いっぱい……貴方の懺悔、お受けしますからっ♪』

リリウ

「私……何度だつて、貴方の罪の告白を聞いて、体で……受け止めちゃいますからっ♪
それが出来て、私……きっと初めてちゃんとしたシスターになれると思うんです！」

だからその日まで……私が懺悔を聞く相手は、貴方だけ……ですよ♪
はい、神様に……主（しゅ）に誓って、お約束しますっ♪」

△ぎゅ……♪

（リリウから抱き着く音）

リリウ

「えへ、えへへ♪ 私の初めての、貴方？」

罪を教えて下さった、愛しい貴方♪

貴方が、罪や後悔を覚えずに、悩みなく健やかに日々を過ごしていけるようになるまで。

私……ずっと、ずっと、お付き合いしちゃいますからね♪

んつ……ちゅつ♪ ……えへへ♪」